

Ready Set Go!

よーい
どん!

特集

文字への 慣れ親しみ

Tips for Activities!

～インタビューをしてみよう～

コミュニケーション能力を
育成するために

文字への慣れ親しみ

来年4月から始まる小学校の外国語科では、これまでの「聞くこと」「話すこと」に加えて、「読むこと」「書くこと」の2技能も扱われるようになります。子どもたちにどのように文字と慣れ親しませ、書く活動へと導くのか。文字指導をおこなう際のポイントや留意点はなにか。酒井英樹先生、田縁眞弓先生、物井尚子先生の3名の先生方にお話を伺いました。



田縁 眞弓 先生



酒井 英樹 先生



物井 尚子 先生

はじめに

酒井 「書くこと」について指導する際に、子どもにどのような形で文字と出合わせ、書く活動へと導くのか。そして実際に書く活動をおこなう際にどのような点を注意するべきか。きょうはこのような話題を中心に話をしていきたいと思います。



書く活動に入る前の準備

文字の認識／文字への慣れ親しみを十分に

酒井 今回の学習指導要領の改訂では、3、4年生に外国語活動が入りました。「書くこと」と「読むこと」の指導は5年生から始まりますが、「音を聞いて文字を判別する」、「聞く段階において文字に親しむ」という活動は3、4年生からおこなわれます。そのことを含めて、5、6年生での文字の指導はどうすべきかということについて、考えをお聞かせください。

田縁 3、4年生で文字の形に親しみ、5年生になって書く技能を定着させましょう、というのが現状での流れですが、5年生になって集中的に、「さあ、アルファベットを覚えましょう」というよりも、3、4年からなだらかに書く活動の準備をおこなっ

ていくのがよいのではないのでしょうか。時間をかけて、文字にたくさん触れさせ、意識させるなど、書く前の準備段階を十分におこなってあげたいですね。アルファベットの順番やそれぞれの文字の形や音を認識する活動を取り入れるとよいでしょう。そして、自分の名前を書いてみたり、身のまわりのアルファベットを書き写してみたりという活動を十分にしたあとに、5年や6年の終わりごろでまとめをおこなうのがよいと思います。

酒井 文字について3、4年生から意識させ、レディネス¹が高まったところで書く活動をおこなうということですね。

田縁 実際に書くという活動においても、アルファベットのAからZまでをまとめて書かせるのではなく、「G」などとひとつの文字の名称が発音された際にその文字が書けるように、さらに、B, H, Oと続けて言われたときにB, H, Oと書けるように、といった活動が先に必要なのではないかと思います。AからZまで大文字・小文字をすべて書きましようという活動から始めるのではなく、自分のイニシャルや、グループのメンバーで共通するイニシャルを書いてみたり、英語の略語を書いてみたりといった活動を通じて、文字に触れる体験を少しずつさせるというところから始めていくほうがよいと思います。

酒井 書くことについての指導をあまり急ぐ必要はないということですね。文字に触れること、文字に慣れ親しむことをいろいろと経験させて、最後に整理をするという流れがよいというご意見でした。文字を書けるようになる前の慣れ親しみについて、物井先生はどうお考えですか。

物井 書くことの背後にあるものとして、たとえばAという文字であれば、①文字の形、②A（エイ）という名前、③/æ/の音という3つの認識が必要になると思います。3、4年生の間に、これらの認識を深める活動を少しずつおこなっておくと、5、6年生での読み書きに有効につながると思います。

それから、文字を読んで情報を得るということの意味を、比

1 学習者が効果的に学習するための必要条件として、一定の知識・経験・心身などの準備ができている状態

較的早い段階から子どもたちに実感させられるような活動をおこないたいですね。「b, i, g で big。『大きい』という意味になるんだね」と、文字と意味とを結びつけて指導をすると、絵からだけでなく文字からも情報が得られて、子どもたちはうれしいようです。

酒井 音と文字の組み合わせは、単独で繰り返すだけだと機械的な活動になってしまいますが、それがつながると意味のあるものになるということを意識して指導するとよい、ということですね。

文字と音との関係／読み書きの土台は音！

酒井 先ほど物井先生が、文字の形、名前、音の3つの認識が書くことの背後にあるものとして必要だとおっしゃいました。アルファベットの知識、大文字・小文字の知識、音の意識、音に関する特徴などを知っておくこともまた、読み書きの能力に影響すると言われています。こうしたことも、書く前に身につけておくべき事柄なのではないかと思います。

物井 5, 6年生で、「読むこと」「書くこと」の2技能が加わる、ということにばかり焦点が当てられていて、読み書きの土台が音であるという認識になかなか結びつかないように感じます。音の情報がなくて書けないということを、十分に理解して指導に臨むのが、リタラシー指導²の成功の鍵になると思います。

田縁 絵本の読み聞かせなども文字と音との結びつきのためによいですね。先生が文字のある絵本を見せながら読み聞かせをするとき、そこにある文字を先生が読んでいるんだということを子どもたちは知っているわけです。子どもたちはそこにメッセージがあるのだ、ということに気づき、いつか自分でも読んでみたい、という思いが徐々に育つことも考えられます。音声から入って次に文字を意識してきた子どもたちは、文字を見れば「一体なんて書いてあるのだろう」と読み取ろうという態度が育ちます。しかし、そこに十分な時間をかけられないと、文字を見せられてもあえて自ら読んでみたい、という意識に欠けるように思います。音から文字へ、というところをこれまで私たちはあまり考えてきませんでした。こういったスムーズなリタラシー指導の観点は、小学校での英語指導がどのような役割を担うべきか、という点において今後重要になってくるように思います。

3, 4年生での外国語活動／ローマ字学習との関連は？

酒井 3, 4年生の外国語活動ではどのような点に留意しながら文字を指導すべきでしょうか。

田縁 ローマ字指導が3年生の国語で入ると、数時間の指導で子どもの英語での書きが飛躍的に進みます。それを見ていると、発達レベルから、3年生の国語で大文字・小文字を書くことがおおむねできる。その後さまざまな慣れ親しみをおこなってから、5, 6年でまとめるのがよいかと思います。もちろん、特別支援などの視点は忘れてはいけません。

物井 いまの田縁先生のご指摘は興味深いです。ただ、Xなどはローマ字では習わないですね。そうするとどうなるので

しょうか。XやQなどの、国語のローマ字の授業で習わなかった文字については学習が遅れてしまうということでしょうか。

酒井 ある小学校の5, 6年生で、文字指導は基本的に国語でのローマ字以外はおこなわないというところがあったんですけども、ローマ字で学習した文字と比較して、ローマ字で学習しなかった範囲については間違いが多く見受けられたんですね。そういった意味では、3, 4年生では文字に触れて、5年生ではAからZまでまんべんなく指導するというよりは、今回は順序を意識しようとか、今回はあまり見慣れていない文字について集中的に学ぼうとか、ピンポイントでの指導が重要だろうと思います。

実際に書く活動をおこなうにあたって

文字の形と4線の利用／「正しい」よりも「伝わる」文字を

酒井 次に、実際に書く活動の指導の際に、小学校の先生方に注意してほしい点などがあれば教えてください。学習指導要領の解説では、「四線上に正しく書くことができるようにする」という記述があります。これに関してもいろいろ気をつけることがあるのではないかと思います。また、文字の形についても、絶対に「正しい・正しくない」というよりは、「判別しやすい・判別しにくい」という観点で指導していくことが大切なのではないかと思います。その際に、伝わるための形の意識づけをどのように実現していくとよいのでしょうか。

物井 4線を使ってきれいに書こうという活動が、人に情報を伝えることができるような「見せる文字」を書かせるためには必要なのではないかと思います。子どもが英語でも字を書きたいという気持ちを持ち始めたころに、4線を用いて、伝えることのできる文字を書けるように指導をするというのもひとつの案かな、と思います。

田縁 4線があると3, 4年生でも少なくとも自分の名前は意識して正確に書けるようになります。5, 6年になると一本の野線上でも書けるように、段階的に線を減らして指導しています。4線に関しては、いつ使うのか、その時期が重要になってくると思います。

酒井 大学生は野線の上に字を書くことが多いですが、変な書き方をしている学生が結構います。基線の意識が不十分なんですね。そういった意味では、4線を用いて書くという活動がどこかで必要だと思います。

それから、文字の形に関して、最近は従来文字の形について厳しかった国語でも、文字の「とめ」「はね」を厳しく見なくてもよいのではないかと、という流れになってきているようです。



酒井 英樹(さかい・ひでき)

信州大学教授。テンブル大学大学院博士課程修了。教育学博士。専門は英語教育学、第二言語習得。中学校英語教科書 NEW CROWN 編集委員。著書に『小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシャルズ』(共著、三省堂)、『小学校外国語活動 基本の「き」』(大修館書店)、『小中連携を意識した中学校英語の改善』(共著、三省堂)がある。

英語でももっとゆったりと文字について捉えてもらってもよいのかもしれないね。

児童が間違えやすいポイント／スペースの意識づけ

酒井 子どもたちはすでに日本語を書く経験はしているわけですが、英語を実際に書く際に、困難になるというか、配慮すべき点としてなにかお気づきの点はありますか。

物井 英語で大文字・小文字を書かせるときに、子どもたちが形をうまく取れなくて苦労する、ということはあまりないですね。それこそ漢字などでもっと複雑な線をいつも書いているからでしょうか。ただ、似た文字が多いので、dと書くべきところにbを、pと書くべきところにqを書いてしまうなどの間違いはよくあります。

酒井 そういった間違いを見たときには、やはり直してあげる、という指導のほうがよいのでしょうか。

田縁 書かせる活動の際には、黒板に4線を引いて全体で答え合わせをしますね。意図的に教師が答えを間違えて書いて、“OK?”と尋ね、子どもに間違いを指摘させるという答え合わせはよくします。あとは高学年になってもスペースを空けられない子が多いですね。鉄則のように“Space, OK? Period, OK?”と何度も言っても、スペースを空けていなかったりします。スペースがいちばん難しいんですよ。日本語では単語の塊のあとにスペースを空けるということがないので、子どもたちには違和感があるのかもしれない。

酒井 このスペースについてはどこかのタイミングで指導が必要になってくるでしょうね。日本語の場合は漢字とひらがなが混ざっているのでどこが区切りかわかりやすいけれど、英語ではつなげて書くと区切りがわかりにくい。だからスペースを空けて区切りを明確にする必要がある。そのように、なぜスペースが必要なのかを説明してもよいかもしれません。

指導の際の留意点／なんのために文字を教える？

酒井 「文字を書く」ということについて最近懸念しているのは、書くことが単にいわゆる練習になってしまっていることです。書いたことがだれにも読まれないし伝わらない。そのような書く活動をおこなっているところが多いですね。書いたものがだれかに読まれ、メッセージが伝わる、という体験にしなければ、子どもたちはただ書かされた、ということで終わってしまいます。

田縁 ローマ字を初めて学んだ3年生は、ALTに手紙を書き始めるんです。日本語をローマ字で書いているだけなのですが、書くということは思いを伝えることなのだとことを子どもたちはそもそも知っているのだと実感します。このような書くことの目的を忘れてしまっているはいけません。書く目的を

感じさせる活動をおこなうことが大切だと思います。

物井 書くという行動を意識しすぎて、書くことの目標や目的がないままに活動をおこなってしまうと、子どもにとって意味のない時間になってしまいます。そういった指導は避けたいですね。

酒井 ひらがなや漢字などの日本語を読めるようになった子どもは、外で目にするいろいろな文字をとにかく読もうとします。そういった子どもの「読みたいな」という気持ちや、「あ、わかった、そういうことが書いてあるんだ」という実感を、英語教育の中でももっと体験させてあげたいですね。

4技能5領域のバランスを考えたときに、書く活動の指導についてほかに気をつけてほしいことなどはありますか。

田縁 児童の気づきを待たずにどんどん音と文字の指導をルールとして進める、授業の大半を文字指導に費やす、書く活動ばかりを副教材を使って徹底的に指導し、黙々と書かせている、こういった場面を見かけることがあります。また、書く活動をいったん始めると、時間がなくなり個々の確認もせず授業が中途半端に終わってしまう、これも自戒をこめて気をつけないといけないところです。

いったん「書く指導」を始めると、個人差がとても大きいです。先生方はスローラーナーを気にかけてがちで、結果、もっと先へ進んでいきたい子どもたちの動きを止めてしまうこともあります。そのため、スローラーナーのためのセーフティーネットの準備とともに、進みが速い子のための先へのチャレンジ課題もあらかじめ準備することが必要だろうと、指導を通していつも感じています。

酒井 同じ文字を繰り返して練習するよりも、意味のあることばを書く活動を通じて徐々に書けるようになっていくという方法がよいと思います。最初から文を書くとか、きれいに正しく書くとかいうのではなく、単語から少しずつ書けるように、という長い目で見たプロセスを意識してもらえるとよいでしょう。それから、子どもの学び力、気づく力というのはとても大事です。子どもの気づく力をほめてあげるような指導を心掛けてもらえるとういと思います。

個人差への対応／教えたこと≠子どもの学び

酒井 先ほど子どもの個人差についてのお話がありました。先にどんどん進んでいける子や苦手な子、それぞれへの対応に関して、書くことの指導の際に気をつけることはありますか。

田縁 音と文字の指導は、ついていけない子どもにとっては本当につらいんですよ。でも、まず児童がどこでつまづいているかをしっかり見極めたうえで、文字をなんとか書けるように時間をかけるよりも、ほかの得意なところを伸ばしてあげて、時期を待つほうがその子たちにとってよいこともあるかと思います。あと、文字指導に関しては、先生の「教えたぞ!」という実感と子どもの「学び」は必ずしも同じではないということも知っておいたほうがよいと思います。いろいろな指導法がありますが、あまりひとつにとらわれず、まずは目の前の子どもたちの学びを支える文字指導を先生が考えてあげることが大切です。

田縁真弓(たぶち・まゆみ)

京都ノートルダム学院小学校英語科スーパーバイザー、京都教育大学連合教職大学院非常勤講師。小学生への文字指導、絵本を使ったのストーリーテリングなどの教員研修をおこなう。また、小学生を対象とした英語教材開発もおこなっている。



酒井 文字の学習というのは、母語ですらディスレクシア³などの障害が判明しやすい学習行為なんですよ。そういった意味では、教えたら学ぶだろうという認識ではなくて、子どもがいまどのような状況にあるのかということを常に丁寧に把握して、苦手な場合にはむしろほかの力を伸ばしてあげながら、寄り添っていくことが大事なのではないかなと思います。個人差について物井先生はどう思われますか。

物井 書くことに関しての個人差はとても大きいです。書く速度にも差が出てしまうので、書く活動では7分以内などと時間を決めて、それ以上時間がかかる人は家でやってくるようにするなど、授業内で書くことを扱う時間の制限を教師がある程度するようにしています。

田縁 文字の形の認識がとても遅い子もいるわけですから、いろいろな助けが必要だと思うんですよ。ビジュアルの助けや、下に英語の文字を書いておいて書き写せるようにしておくなどのセーフティーネットが必要だと思います。子どもに「やさしい」教材が必要です。

文字指導の実践例／目的のある活動を

酒井 次に、文字指導の具体的な実践方法などを伺いたと思います。

物井 アルファベット表を見ながら、ABCソングを歌います。そのときに文字に何色か色をつけておいて、青の文字だけ歌ってみようとか、子どもたちが苦手なJなどの文字を虫食いにしておいて、空白を埋めるように歌わせるなどすると、26文字の羅列ではなくて、それぞれひとつひとつの文字に意識がいくようになるんですよ。色を使った活動の際には、色の見分けがしにくい児童でも見分けやすい配色にするなどの配慮をすることも大切です。

ほかには、身近な企業や商品のロゴを見せて“What's this letter?”と問いかける活動もおこなっています。たとえば、あるクッキーの商品名を、まず黒板に書きます。それだけだと子どもたちは、文字を1字ずつは読めるんですけど、単語としては理解しないことも多いんです。でも、ロゴやパッケージを見せると単語として理解できて、英語を読めたことに感動していました。このような実生活に関連した文字の役割というものも授業でも見せてあげられるとよいように思います。

それから最近、留学生から手紙をもらって、おすすめの場所を紹介する返事を書く、という活動の授業を見学しました。その授業では活動に見通しがあり、最終的な到達目標がきちんと決まっていて、その過程の所要所で文字を散りばめてあるので、活動に関係ある文字を毎時間見ることができるようになっ

ており、とても良かったです。

酒井 いまの指導法に関して、子どもは見慣れている文字の形だと認識できるけれど、ほかの字体だと認識できなかったりするんですよ。見慣れている形とそうでない形に隔たりがあるということを指導の際に留意しておくべきだと思います。

ほかになにかありますか。

田縁 高学年ではビンゴゲームなども、工夫次第で、いろいろな指導目的を持って書く活動にすることができます。まず、シートを作る際は、指導者が言った文字を聞いて書く活動します。次の授業では、そのシートを使ってグループごとに自分が○をつけたい英語の文字を順番に言い、ビンゴゲームをします。これは、文字を認識して名称あるいは音を言う活動になります。アルファベットジングルなどで十分音声に慣れ親しんでいれば、その文字で始まる単語を言って初頭音のアルファベットに印をするというやり方でもできますね。

それから、機会があれば姉妹校の児童やALTに、（大部分は書写でもいいので、）ちょっとした英文レターを書いて送るという活動は、児童に書くことの本当の意味に気づかせる貴重な経験になるかと思います。

酒井 単語を書き写す活動でも、ALTの先生にすすめたい季節を書き写す、などの「目的」を加えると、自己表現の場になり、やり取りをする機会にもなります。書くだけの活動にするよりも、話す活動と聞く活動をうまく組み合わせるなどして、書くことの指導を工夫できるとよいですね。

まとめ／4月までの準備期間、どう過ごす？

酒井 最後に、来年の4月に向けて先生方が準備しておいたほうがよいと思うことはありますか。

物井 検定教科書が使用開始になります。教科書によっては現行の*We Can!*と文字の扱い方が異なるかもしれません。ですが、ご自分が教えたことやどんな学習者を育てたいかなどのポリシーを持っておくと、どんな教科書になっても、おこなう活動や授業の進め方の見通しが持てるのではないのでしょうか。

田縁 低学年を指導する先生方は、アルファベットと仲良くなることを目標として、楽しんで活動をさせるということを念頭に置いておかれるとよいと思います。中学年ではローマ字指導の位置づけを頭の中で整理しておくともよいでしょう。高学年では、最終的に文字を書くということの目標はなにかということと考えながら、今後の文字指導に臨まれるとよいかと思います。文字を見たときに「読みたい」という思いが湧き上がるような指導をしていきたいものだと思います。

酒井 きのうの座談会では文字を学ぶということの学習のプロセスや、子どもが学んでいかなければいけないことについての話が出ました。外国語科の目標として、「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することを目指す」とあるのですが、書くことはその一部分でしかないんですね。そのことを念頭に置いて書くということを指導していくと、バランスがよい、総合的な学びにつながるのではないのでしょうか。

物井尚子(ものい・なおこ)

千葉大学教育学部准教授。テンブル大学大学院博士課程修了。教育学博士(Doctor of Education)。専門は英語教育学、早期英語教育、学習者要因の研究。著書に『小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシャルズ』(共著、三省堂)がある。



Tips for Activities!

やってみよう
英語活動

自分の考えや気持ちを伝え合う言語活動のひとつとして、インタビュー活動をおこなうことができます。学習のねらいや児童の実態に応じて、さまざまなかたちが考えられます。今回は、実践をもとにいくつかの例をご紹介します。

インタビューをしてみよう



使用するもの

- 絵カード（必要に応じて）
- インタビューシート（必要に応じて）

インタビューシート

「好きな動物をたずねてみよう（よそう：○ けっか：♡）」

またの先生	 cat	 dog
 frog	 sheep	 bear
 duck	 horse	 bird

手順

A. 児童から指導者へのインタビュー

児童同士のインタビューがまだ難しい段階では、児童全員で指導者の好きなものを尋ねる活動を設定しています。尋ねる前には、児童が指導者の答えを予想することで、指導者の好きなものがなにか聞いてみたいという思いを高めます。

(1) インタビューの前に

絵カードを掲示し、どのように予想したか、クラス全体に尋ねます。

T：（絵カードを指して）I like bears. Yes or no?
“I like bears.” Please raise your hand.

(2) 実際にインタビューをおこなう

Ss：What animal do you like?
T：I like bears.
Ss：Me, too. / Really?

B. 児童同士のインタビュー

児童同士でのインタビュー活動にも、さまざまなかたちが考えられます。児童が一对一で尋ね合う活動はもちろん、実態に応じてペアやグループで協力して活動することもひとつの方法です。児童同士で尋ね合う場合も、相手の答えを予想してから尋ねるよう指導します。

〈一对一で〉

児童が相手を見つけ、一对一で尋ね合います。初めから自由に歩き回り相手を見つけることもひとつの方法ですが、まずは、隣の友だちやグループの友だちと尋ね合い、その後、自由に歩き回って友だちを見つけて、と段階的に活動を設定することも考えられます。

〈友だちと協力して〉

ペアやグループで協力してインタビューをおこないます。一人が尋ね、もう一人がその結果を記録する、あるいはグループのメンバーで手分けして学級全員にインタビューする等、実態に応じてさまざまな活動が考えられます。

・ペアやグループで役割を交代しながら

S1：Do you like frogs?
S2：No, I don't.
S1：OK.
S3：Thank you.（わかったことをメモする）

・グループで協力して学級全員に

インタビューをする相手をグループ内で分担し、各自インタビューをおこないます。学級のみんなが好きな遊びを調べる活動などに取り入れやすい方法です。

S1：Do you like tag?
S2：Yes, I do.
S1：OK. / Me, too. / Really? / Good.
※各自が集めた情報をグループ内で共有する。



Teacher Talk

Today's activity is “interview.”

今日のアクティビティーは、インタビューです。

Good guess.

（児童の予想に対して）いい推測ですね。

俣野 知里（またの・ちさと）

京都教育大学附属桃山小学校教諭。京都市立小学校での勤務を経て、今年度より現職。現在は、ALT・学級担任と共に、第1学年～第5学年の外国語活動・外国語の授業を担当。



コミュニケーション能力を育成するために

言語活動を通して コミュニケーション能力を育成する

新学習指導要領では、言語活動を通してコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することが目指されています。言語活動とは「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う」ことです。すなわち、コミュニケーションをしながら、コミュニケーション能力を育成するのです。

「聞くこと」の活動の役割

そう聞くと、そもそも英語が話せないのに、そのようなことが可能なのかと思うかもしれません。しかし、実際のコミュニケーションでは、相手の言うことを理解することも必要であり、「聞くこと」もコミュニケーションとして重要であることがわかります。授業では「聞くこと」の活動を通して、聞いて内容を理解する力を育成することができます。加えて、英語を「聞くこと」を通して、使われている語彙や文構造などの言語材料に気付き、学ぶことができます。この気付きというプロセスが大切です。ことばの習得には「聞くこと」が不可欠と言えます。

意味内容から英語表現へ

「聞くこと」の活動の役割を踏まえると、授業での位置づけが重要となりますが、次のような場面を目にしたことがあります。先生が子どもたちにある話を英語で聞かせた後、「どのような英語を使っていましたか」と子どもたちに問いかけました。おそらくこの先生は、聞いた話の中で使われていた英語の文構造を教えたいという意図があった



のでしょうか。ところが、手を挙げて指名された児童は、「〇〇について話していました」と聞いて理解できた話の内容について答えました。皆さんはこの反応をどう思いますか。コミュニケーションとはメッセージ（意味内容）のやり取りです。聞くときには、どんな話だろうとまず意味内容に注意を向けます。これが自然なコミュニケーションと言えます。ですから、意味内容を理解しながら、あるいは、理解した後、必要に応じて「どんな英語が聞こえるかな」などと問いかけてからもう一度聞かせるなどして、英語表現に注意を向けさせ、気付かせる段階へと進むとよいでしょう。

では、「話すこと」はどうでしょうか。「話すこと」の活動は必要な語彙や英語表現を覚え、練習をして言えるようになってから行う発表の場のように考えている方もいるかもしれません。しかし、通常、あらかじめ語彙や文構造が決められていて、それを使って何を言おうかなとは考えません。まず伝えたい内容があり、そのために必要な表現を使います。言語活動では、児童が必要な言語材料を取捨選択して活用できるようにすることが求められています。

「話すこと」の活動の役割

話す活動には、必ずしも発表の場ということではなく、いくつかの役割があります。まず、これまでに身につけた知識を総動員して表現する場です。特定の対話や文構造などに焦点を当てる前の単元や授業の初めに、児童が自分の力で話す機会があるとよいでしょう。当然のことながら、言いたいことがうまく言えないところも出てきます。これは、言えないことに児童が気付き、その表現を学ぶ必要感を持つことにつながります。そこで、英語を「聞くこと」を通して表現などに気付き、学ぶ場面を用意することが大切になります。その後、学んだ表現が活用できるよう、さらに複数回話す機会を持たせます。「聞くこと」と「話すこと」を組み合わせることで、児童が必要なときに必要な表現に自ら気付くことが可能になります。

滝沢 雄一（たきざわ ゆういち）

金沢大学人間社会研究域学校教育系教授。専門は英語教育学。主な著書に『小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシャルズ』（共編著、三省堂）、『英語教師のための「実践研究」ガイドブック』（共編著、大修館書店）、『「学ぶ・教える・考える」ための実践的英語科教育法』（共著、大修館書店）がある。



小学校の外国語で役立つ1冊!

担任の先生のための英語表現集

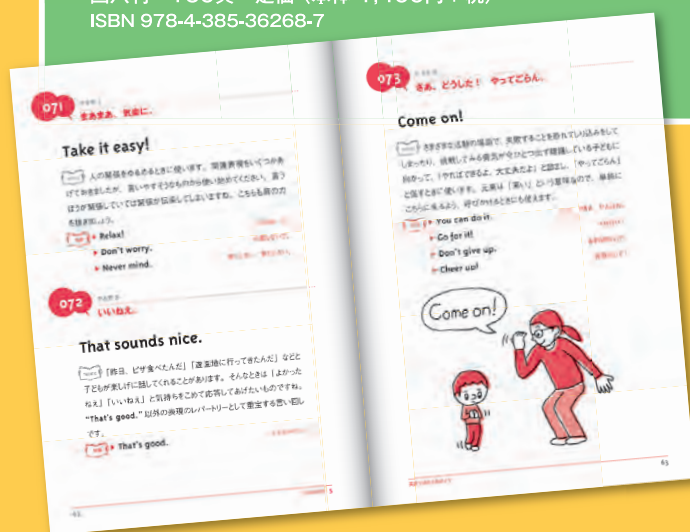
小学校の英語

スマホで聴ける
音声つき

教室で使える基本表現200

〈新版〉永井淳子・粕谷恭子〔著〕

四六判 160頁 定価(本体1,400円+税)
ISBN 978-4-385-36268-7



小学校での外国語の授業を楽しくす
めていくために必要な基本表現を200
に厳選。活動の中で、自然に英語に触れ
ながら、楽しくコミュニケーションをする
ための1冊です。ALTとの打ち合わせに
役立つフレーズも収録しています。

CONTENTS

Chapter 1

英語を気楽に使ってみよう
(あいさつ・つなぎことばのフレーズ)

Chapter 2

英語で授業をすすめてみよう
(授業の進行・活動の準備のためのフレーズ)

Teacher Talk ① ピクチャーカードを使ってみよう
コラム① まずは気楽に取り組もう

Chapter 3

英語で子どもを動かしてみよう
(活動の中で使う基本フレーズ)

Chapter 4

英語で確かめてみよう
(子どもに確認を求めるフレーズ)

Teacher Talk ② 歌を歌おう
コラム② ティーチャートークのちょっとしたコツ

Chapter 5

英語でほめてあげよう
(子どものやる気を引き出すフレーズ)

Chapter 6

英語で思いっきりしかってみよう
(注意したり、たしなめたりフレーズ)

Teacher Talk ③ 体を動かそう
コラム③ 歌いながらオニを決めよう

Chapter 7

英語でアクティビティを楽しもう
(活動の中での具体的な指示のフレーズ)

Teacher Talk ④ ジャンボカルタ取りをしよう
コラム④ 知っておきたい学校用語

Chapter 8

英語でゲームを楽しもう
(ゲームの中で子どもを動かすフレーズ)

Chapter 9

英語で子どもとのやりとりを楽しもう
(コミュニケーションを活性化させるフレーズ)

Chapter 10

英語で ALT と気楽に話そう
(ALT との打ち合わせや授業で使えるフレーズ)

Teacher Talk ⑤ パノラマで遊ぼう
コラム⑤ ALT との授業を積極的に

基本表現リスト

(この商品は「SELF BOOKS 7 小学校の英語 教室で使える基本表現200」の新版です。)

三省堂教科書・教材サイト <https://tb.sanseido.co.jp>

三省堂

〒101-8371 東京都千代田区神田三崎町 2-22-14 TEL (03) 3230-9411 (編集)・9412 (営業)

●大阪支社

〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地 2-5-3 TEL (06) 6341-2177

●名古屋支社

〒460-0002 名古屋市中区丸の内 3-21-31 協和丸の内ビル 2F TEL (052) 953-9211

●九州支社

〒810-0012 福岡市中央区白金 1-3-1 TEL (092) 531-1531

●札幌営業所

〒060-0042 札幌市中央区大通西 15-2-1 ラスコム 15ビル 3F TEL (011) 616-8722